恋文

紫月

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=16927130

ヒュンマ

正確には、「の、ようなもの」。

★☆ 必ずお読み下さい ☆★

この作品は、今後公開予定の長編小説の前日譚になります。
その長編小説では、原作終了後、ヒュンケルとマァムが結ばれるまでを描きますが、
本作においてはまだその段には至っておらず、ハッピーエンドとはなっておりません。
ヒュンマファンの作者としては、ここから始まるふたりの恋路を描いていきたいという
願いがあるわけですが、本作を単体で見たとき、
おそらくは好みでない方も一定数はいらっしゃるかと思います。
幸せなふたりの姿をご覧になりたい方は、ご自身の判断において閲覧をご検討下さい。
また、本作は原作終了時の、ある重大なエピソードに触れている部分があります。
その点もご理解いただきたく、お願い致します。

参考までに……
①本作執筆中のBGM　オリジナルサウンドトラック１より「レクイエム」
②本作執筆の背景　「ヒュンマ好きさんに10のお題」novel/15030430より

「もう会えないかもしれない」

「そうか、ここから盛り上がっていくのか、見てあげましょう！」
という方がいらっしゃったら、
読んでいただければ、もちろん、大変にうれしいです。

★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆

2022年2月5日（土）、ヒュンマフェス・ウィンターが開催されました。
おめでとうございます！＆ありがとうございます!
こうした場を与えていただき、多くの方に自作をご覧いただける機会があるということは、
大変に励みになり、大きな喜びです。
主催者様・ご一緒させていただいた皆様・足を運んで下さった全ての皆様に、
心より感謝申し上げます。
「お祭り」の雰囲気には似つかわしくない作品ですが、
ヒュンケルの恋心を精一杯美しく書こうと頑張りました。
読んで下さった方々の胸に、何か響くものがあれば幸いです。

素敵な表紙を、こちらからお借りしました。　illust/85307107

恋文

1

元来、物には全く執着がないので、荷物の整理も簡単なことだろうと思っていた。それでも、数年をパプニカ城内に借り受けたこの部屋で過ごしたとなれば、意識しないうちに細々とした日用品は溜まっているものだ。なおかつ、それらを周囲に気取られることのないように処分していくとなると、当初ヒュンケルが想定していたよりは様々な手間が掛かる。結局、持ち物の大部分を処理し終えるには、半月余りの時間を要することとなった。
最後に残ったのは、捨てることの出来ない、どうにも扱いに困るもの、数点だった。例えば、世界各国の王家から賜った、幾つかの勲章であるとか、かつて師より預かった、貴重な古文書であるとか。誰にも知られぬまま旅立つつもりであるから、他人に預けるわけにもいかない。
迷った挙げ句、ヒュンケルはそれらを小さなトランクにひとまとめにしておくことにした。城下町で、いかにも頑丈そうな、革のトランクを買い求める。店中で一番小さなものを選んだのに、収めるべきものを次々に入れた後、それでもかなりの隙間が残った。
これでいい。ヒュンケルは、ひっそり嗤って考える。
彼の姿が城から消えても、おそらく数日は、誰もそれを問題視はしないはずだ。そこからさらに数日が経って、さすがにおかしいと感じた誰かが———おそらくはポップあたりが———、この部屋に立ち入り、ヒュンケルの行方を示す手掛かりを探そうとするだろう。そして、備え付けの家具以外、何も残されていない室内を見て、彼の失踪が意図的なものであると悟るに違いない。ポップは怒り狂うだろう。
———あいつは、また、ひとりで勝手をしやがって！
かつて何度も投げつけられた言葉たちから、そんな台詞が自然に思

い浮かび、ヒュンケルは再び小さく嗤う。
報せを受けたレオナは、内心では悲しみ心配することだろうが、表面上はあくまで毅然と、ヒュンケルの決断を受け入れるだろう。決して王者のあるべき姿を忘れることなく、冷静沈着に今後の対応を指示することだろう。
――――部屋は、そのままにしておいてちょうだい。
数年の付き合いのうちに、知らず知らず彼女の人柄も理解出来てきたということなのだろうか、ヒュンケルには、彼女のそんな声も聞こえる気がする。
――――必ずヒュンケルは戻ってくるんだし、そのとき、私たちが彼を迎えてあげなくて、どうするの。
それでも、いつ戻るとも知れぬ者のために、いつまでも王宮内の一室を空けたままにしておくわけにもいくまい。ヒュンケルがいなくなったとて、城内に居室を与えられることで、国益となる働きの出来る者たちがパプニカにも多くいるのだ。
だから、いずれこの部屋も、誰かの手で片付けられることになるだろう。そのとき、その誰かを煩わせることは、極力避けたいとヒュンケルは思う。
小さなトランクは、その点、本当に便利だ。たとえ女性であったとしても、片手で運ぶことも出来るし、第一、精神的な負担というものが全くない。中に収められた品を目にすれば、あるいは心乱れる者もいるのかもしれないが、その形を見なければ、ただ機械的に運び出すだけで済む。
その人物は、おそらく荷をレオナの元へ運ぶはずだ。中身を検める際、彼女の他に誰かが立ち会うことになるかどうかは、ヒュンケルにも想像がつかない。気丈な女王はひとりで心の重荷に向き合うようにも思えるが、公でない空間・時間で、本当に心許せる仲間とともに、ヒュンケルの残した思いを間違いなく読み取ろうとするようにも思える。いずれにせよ、彼女の心には、決して軽くない負担を強いることとなってはしまうだろう。申し訳ない気持ちはあるが、世界にただ五人しかいない、同じアバンの使徒としての絆に免じて、そこは許してもらうしかない。
思えば、七つも年下の若い女王に、出会ったときから、自分は甘

えっぱなしだった。生まれた立場もあるだろうが、比類なき賢さと生来の心の強さが、彼女を自分などより、はるかに大人にしていたのだと思う。つくづく、自分は弱い人間だった。だからせめて、そんな自分に返せるものを、彼女に返してやりたいと願うのだ。
明日の夜明け前、彼は魔界へと旅に出る。不在は、長いものになるはずだ。もしかしたなら、永遠にさえ———。
トランクの蓋を閉めようとして、ふとその手が止まる。彼が作業をしていたのは、落ち着いた色合いのライティングデスクの上だったのだが、その抽斗の中に、まだ私物があることを思い出したのだ。
数日前、処分をしようとして捨てきれず、ぐずぐずと判断を先延ばしにしていたもので、危うくそのままにしてしまうところだった。
ふうっと、ひとつため息を吐き、ヒュンケルは、やや緩慢な仕草で中身を取り出す。
それは、小さな三冊の画帖だった。セピア色の表紙の、ごくごくありふれた品であるものの、この期に及んでもなお、彼にとっては手放すことの出来ないものだった。
指先でそっと、表紙を撫でてみる。本人は気付いていなかったが、慈しむような手つきだった。何度も何度も同じ動きを繰り返し、思い切ったように表紙をめくる。途端、懐かしい光景が目に飛び込んできて、意識が一気に過去に押し流される。
どこか遠くで、鳥の鳴く声がした気がする。それが現在のものなのか、それとも記憶の中のものなのか、ヒュンケルには、判別出来ない。

2

最初の画帖を手にしたときのことは、よく覚えている。大魔王との、地上を賭けた激戦が終わり、消えた勇者・ダイを探す旅路でのことだった。
そのころヒュンケルは、ダイの忠実なる従僕・ラーハルトと、パプ

ニカ三賢者のひとりであるエイミと、三人で世界各地を探索していた。当初は、ひとりで旅立つつもりであったらしいラーハルトに、半ば無理矢理、ヒュンケルが同行を申し出たのが、このパーティーの始まりである。
———剣のひとつ、まともに振るえん奴に来られても、邪魔なだけだ。お前は、パプニカでおとなしく療養に専念していろ。
その言葉は、本音半分、思いやり半分といったところであっただろう。内心の優しさを素直に出さないところなど、彼らは実に似た者同士の親友なのであって、ラーハルトの気持ちは、ヒュンケルにもひしひしと伝わってきてはいた。しかしそれでも、黙って従うわけにはいかなかった。
———確かに、今のオレでは、まともな戦力にはなれないだろう。しかし、まずお前が地上を探すつもりでいるなら、少なくともオレの、この面が役に立つ。
———……半魔のオレでは、情報収集に手こずると言いたいわけか。随分、はっきりと物を言ってくれるな。
———遠慮がないのはお互い様だろう。
———確かにな。
ラーハルトは、鼻先で、けれどそれほど不愉快でもなさそうに、フンと嗤ってみせた。
———まあ、それはあくまでも見てくれだけの話であって、オレとて中身は、一般の人間とはかけ離れているだろうと、自覚はしているがな。しかしそれでも、表面的な事柄に左右されることも多いのが、人というものだろう。今となっては本当に幸いなことに、幼いころに師に受けた指導のおかげで、人間界の文字の読み書きにも不自由はない。戦闘以外でも、お前の役に立てることは、幾ばくかはあるはずだ。
———なるほど……地上においては、そういう場面もあるかもしれないな。とはいえ、だ。すでにこの数ヶ月、地上のめぼしい場所は、あらかた探し尽くされた感がある。もちろん、端々まで隈なくというわけにはいかなかっただろうから、最初は地上を捜索することにはなるだろうが、その後、魔界や冥界にまで手を広げた際に、お前が同行するメリットは何だ？残念ながら、魔王亡き後の地上の

ように、平穏というわけにはいかないぞ。
――……解っている。
そのときは、ラーハルトの盾にでも、弾除けにでもなるつもりだった。今の自分がすべきこと、出来ること。それが、勇者を地上に取り戻すことであり、ラーハルトが、その能力に秀でた人物であるなら、彼を守るために己を捧げることも、やぶさかではない。
しかし、ラーハルトは、そこまでヒュンケルに語らせはしなかった。
――勝手にしろ。足手まといになったときには、遠慮なく捨て置いていく。
そんな言葉で、ヒュンケルの旅立ちは決まったのだった。
その後、どうやら似た経緯でエイミもラーハルトを口説き落とし(後からラーハルトがぼやいてみせたことには、半ば脅し文句で同行を認めさせたらしい)、こうして三人は行動を共にすることになった。
いざ旅を始めてみれば、それぞれが足りないところを補いあい、なかなかにバランスの取れたパーティーであったようには思う。
そんな中、とある村で立ち寄った市場で、ヒュンケルは、最初の画帖に出会ったのだった。
これまでの人生において、絵を描いた経験など、ほぼないに等しく、何故それを手に取る気になったのか、説明は出来ない。本当に幼いころ、養父の元で過ごしていた日々に、手すさびで絵を描いた記憶が立ち上がり、懐かしさを覚えたということはあった気がする。加えて、復興の中途にある世界の有り様を、記録して留めておく必要性を感じていたのも事実だった。普段、無駄遣いなどほとんどしないヒュンケルであったが、そのときは、ほぼ衝動的に、画帖と鉛筆を買い求めてしまったのである。
――なんだ、剣にしか興味のない無風流な貴様にも、意外な趣味があったものだな。
ラーハルトの皮肉にも反論する気も起きないほど、自身の無骨さは自覚していたので、ヒュンケルは、苦笑いしてみせるしかなかった。
ところが、一体どうしたことか。いざ描き出してみると、どうやらヒュンケルには、生まれ持った絵心のようなものが存在していたら

しい。最初の一枚は、かの村から少し進んだ山奥の、崖崩れで寸断された道を写し取ったものだったが(後に施政者に報告するつもりで描いたのだ)、ごつごつと荒く切り立つ岩肌の様子といい、周囲の緑の鬱蒼と繁る様といい、技術的には未熟であるものの、自然の迫力を見る者に訴える、生命力のある絵が生み出されたのである。
―――あら、すごいじゃない。あなた、こんな方面にも才能があったのね。
とは、エイミの弁。
―――よかったな、技術を磨けば、何かしらの道で食っていけるかもしれんぞ。
とは、ラーハルトの言い草だ。
ヒュンケルは、どちらも相手にしなかった。ただ、焚き火に照らされ黙って鉛筆を走らせる野営の夜は、不思議と心の落ち着く一時だった。
数週間後に辿り着いた村では、今度は絵筆と絵の具を購入した。そのころには、彼の画帖には地上に残る傷跡ばかりではなく、仲間たちの横顔や、心惹かれた美しい光景なども描かれるようになっていた。ある日見上げた青い空、魂の吸い込まれそうな透明感を描きたい。そのために、絵の具は不可欠だったのだ。
消えた勇者を思わせる、明るく純粋で、それでいて悲しみも秘めたような、青だった。

開け放したままだった窓から、少し強めに風が吹き込んできた。白いオーガンジーのカーテンが、ふわりと大きく膨らんで揺れる。射し込んだ午後の陽光が、床の上でちらちらと踊った。
遠くで騎士たちが訓練をしていると思しき声がする。ヒュンケルの居室から訓練場まではだいぶ距離があるのだが、おそらくあちらが風上に当たるのだろう。
最近では、彼らもだいぶ頼もしくなってきたと、ヒュンケルは考える。元々が賢者の国であるパプニカは、魔法に関する研究や、その担い手の育成には優れているものの、反面、武力強化に関しては後塵を拝していた。王族の近衛兵を筆頭に、騎士団を抱えてはいたも

のの、カールやベンガーナといった世界の大国に比べれば、見劣りすることは否めない。
この四年弱、レオナに請われて、ヒュンケルは、パプニカ騎士団の顧問のような役割を果たしてきていた。当初は、騎士団長としての尽力を期待されていたのだけれど、この国でそのような要職に就く気には到底なれなかったし、何よりダイの捜索のためには、ある程度自由の保証される立場でいたかったためである。
当時、戴冠前であったレオナは、ヒュンケルの意向を汲み、彼の出立を見送ると共に、この部屋とパプニカでの居場所を与えてくれた。彼女個人の心情としては、ダイを取り戻したい願いの強かったであろうことを含んでも、実にヒュンケルのためを思っての判断であったと言える。
こうしてヒュンケルは、数ヶ月旅に出ては一旦パプニカに戻り、しばしの間、騎士団の訓練を指示しては、再び、消えた勇者を追い求める生活を送ってきた。魔王軍から脱却し、光の使徒として生き直すことを命じられたときと同様に、正義の魂を持つ妹弟子に報いるためには、自分に為し得るふたつの事柄を確実にやり遂げることこそが重要だと考えた。
今振り返ってみれば、それは共に時間が掛かる務めであり、また、歩んでいる途上では、なかなかに成果の見えづらい道でもあったと思う。
騎士団は、ヒュンケルの予想をはるかに越えて頼りなく、個人個人の技量はもとより、組織としての共同も、いかにも未熟であった———もちろんこれは、前の大戦で優秀な人材を多く損失しているが故のことでもあり、ヒュンケルとしてみれば、レオナへの恩義と同等以上の重みを以て、せめてもの贖罪としても、騎士団の再構築に注力しないわけにはいかなかった。
しかし、そこで背負う多少の試練は、勇者の探索に比べれば、はるかに希望に満ち、いっそ楽しいものでもあったと思う。最初は、どうしたものかと頭を抱えた騎士たちも、ヒュンケルの指揮に則り訓練を重ねる中で、徐々に逞しさを増し、今では、他国に遜色ないまでの精鋭集団になりつつあった。
特にヒュンケルを慕ってくれた若き団長は、女王を守り民を守る、

つまりは国を守る戦士としての心得をしっかりとヒュンケルから学び取り、見目の華やかな麗しさとは裏腹に、実に地道に一団を支え、まとめ上げている。その姿勢は、ヒュンケルはもちろんのこと、レオナからも全幅の信頼を寄せられるまでであって、おそらくはヒュンケルが消え去ったとしても、パプニカ騎士団は安泰であろう。
やりがいのあったその仕事に比べ、もう一方の使命である勇者の探索は、いつ終わるとも知れぬ、いっそ終わりなどないのではないかとの絶望を抱きかねない、長く暗いトンネルであった。仲間はひとりとして、弱音も諦めも口にはしなかったが、時が重なるに連れ、焦りや疲労の色が誰しもの顔に浮かぶようになっていたことは、互いに隠しようもなかったことだろう。
地上は概ね探し尽くされ、ラーハルトは、捜索の手を魔界にまで広げた。(その際、同行をがんとして拒む彼に、ヒュンケルは、それ以上の頑なさでついていった)。仲間たちのうち数人は、冥界や天界に至る道を探求し始めた。聞くところによればポップなどは、かつてアバンやマトリフが訪れ、今は地中深くに封じられた伝説の魔導図書館・ヨミカイン遺跡になんとか立ち入れないものかと、あらゆる手立てを試していたという。
追い詰められた状況の中、まさか地上でダイが発見されるなど、誰が想像していたことだろう。
ある夜、テランの人々は、北の空に不思議な光を見たのだという。それは青い流星のようでいて、しかし、どう見ても星屑などではないことには、非常にゆっくりとしたスピードで、「落ちる」というよりは「下ろされる」といった風情であったのだそうだ。
———あちら側の海を越えれば、オーザムだからねえ。
目撃者のひとりである老婆は、後日駆けつけたポップやマァム、メルルにそう語ったという。
———昔、私の祖母が言っておった、オーロラというものが見えたのかと、そう思っておりましたですよ。
ところが、それは自然現象などではなく、竜の騎士が再び地上に戻る恩寵であったわけだ。
発見当初、ダイはひたすらに眠り、肉体だけは戻されたものの、清

らかな魂はいずこかの土地に置き忘れられてきたものかと、仲間たちの哀しみを誘った。しかし生還から二ヶ月後、皆の必死の呼び掛けについに目覚めた勇者は、失踪後の消息を述懐してみせた。
黒の核の想像を絶する爆発に巻き込まれた彼は、その身を天界にまで吹き飛ばされてしまったのだそうだ。神々や精霊たちの住まう天上は、当然のことながら並みの人間が行き着くことの出来る場所ではない。だが、世界の均衡を保つ宿命の下に生まれついた竜の騎士は、神に準ずる存在として、かの地の門をくぐる資格を得られたということなのであろう。
そこで彼は、幼子の昔に還ったかのように、護られ慈しまれ、ひたすらに傷を癒していたのだという。
―――みんな、すごく優しくしてくれたような気がする。
半分夢を見ているような表情で、ダイはうっとりと語って聞かせた。
―――素敵な場所だったよ。でも、おれは、どうしてもここに戻って来たかったんだ。
天界には昼も夜もなく、ダイには、自分がどれほどの間、そこに留まっているのか、判断がつかなかった。時間はゆるりと停滞しているようで、ほんの数週間の滞在にも感じられた。
―――だから……あれは、誰だったんだろう？……白くて、すごく綺麗な神さまだった気がするけれど……そのひとにね……うん、〝ひと〟っていうのは変だけれど、とにかくその存在に、戻して下さいってお願いしたんだ。
どうやら、ダイの記憶から、天界で過ごした時間の、大部分は欠落しているようだった。それが、神々の意思に由るものなのか、ふたつの世界の境界線を跨ぐ際の衝撃がもたらしたものなのかは、人たる者たちには、知る術もない。ただ、なんにせよ、こうして勇者は、彼を待ち続けた人々のもとに帰参することが叶ったのである。
地上への帰還から百日近くが過ぎ、ようやくパプニカ王宮への登城が叶った日のことは、ヒュンケルばかりでなく仲間たちの全てにとって、忘れられない思い出だろう。
謁見の間の扉が開くと同時に、レオナは玉座から飛び下り、まっすぐにダイの胸へと駆け込んだ。いつの間にか自分より背の高くなっ

ていた少年の腕の中で、彼女は、女王としての威厳も品格もかなぐり捨て、声を張り上げて泣いた。
――――もう、離れない。
あんなにも感情を剥き出しにしたレオナを見るのは誰にとっても初めてのことで、それはどう見ても王者に相応しい振舞いとは言えず、ある意味では、見守る全ての人間にとって衝撃的な姿だった。
しかし、
――――離さないんだから、絶対に！
号泣しながら叫ぶ声は、一切の軽蔑も落胆ももたらすことはなく、ただひたすらに巨大な感動で、誰しもの胸を揺らした。
窓からは西陽が射し込み、ようやく再会した勇者と女王の、いや、ひたむきに求め合う恋人同士の、固く抱き合うシルエットを描き出していた。いつかこの場面は、伝説として語られるようになるだろう。そう感じさせる、一幅の絵画のような光景だった。

あの日のことを思い出しながら、ヒュンケルは、画帖のページをめくっていく。それは、三冊ある画帖のうち、二冊目の真ん中よりやや後ろにあった。勇者の凱旋を描いた一葉。
もちろん専門の画家が描いたものに比べれば、技術的には拙さも多々あろう絵ではある。しかし、温かさの中に微かな胸苦しさを覚えさせる夕陽の色合いや、抱きしめるというよりは縋り付くようにダイの首に回されたレオナの腕の有り様など、彼の描く絵には、彼の目を通して見たからこそ映し出される〝何か〟があった。それはもしかしたら、ヒュンケルの歩んだ人生の、他者にはなかなか思い至らせることの難しい、苦渋が滲み出ているが故のことであったのかもしれない。
が、彼自身は、そんなことには一切気が付いていない。今の彼の心を占めるのは、ようやく並んで同じ世界を歩めるようになった妹弟弟子の現状と、これからのことである。
十八歳で成人・戴冠したレオナは、その魂の力に相応しい正義と公正を以て、国民から慕われ支持を集めていた。しかしここにきて、彼女の足元に不吉な亀裂が入り始めていることに、ヒュンケルは気

が付いていた。まだまだ小さく、女王の立つ場を脅かすほどの亀裂ではなかったけれども。
きっかけは、皮肉なことに、ダイの帰還だ。
世界を救った英雄であり、かつて魔王と戦った大勇者・アバンの信任厚い教え子。加えて、民の敬愛する女王の想い人ともなれば、多くの国民は素直にその生還を喜んでくれたのだけれど、中にはダイの出自に不審の目を向ける者も出てくる。予想されたことではあったが、在りし日にダイの父・バランが歩んだ道の茨は、ここホルキア大陸にも根付いていたということだ。
大きな貿易港を抱えたパプニカは、異文化との交流も盛んで、基本的には開放的でおおらかな風土を生み出している。王家を筆頭に貴族階級があり、古の階級制度を残しているとはいえ、どちらかといえば進歩的な考え方をする土地柄なのだ。であるから、現在の王家の唯一の直系であるレオナが、国外から婿を迎え血脈を繋いでいったとしても、相手が好人物でありさえすれば、パプニカ国民はおそらく、女王の決断を受け入れることだろう。
しかし、ダイは純粋な人間ではない。伝説の竜の騎士なのだ。その血が王家に流れ込むことを是としない人々が、レオナの退位を願い、傍流から新たな王を立てたがっているという不穏な風聞が、城下町ではまことしやかに流れている。ある日、王宮内を見回っていたヒュンケルは、門番の兵士たちが語る噂を耳に挟んでしまった。
―――ダイ様だけならまだしも、あの方のことがあるだろう？
―――あの方って……ヒュンケル様のことか？
―――ああ。ダイ様は、あのお人柄だし、とにかく地上をお守り下さったばかりで、何一つ、我らに害を与えることはなさっていないからな。しかし、ヒュンケル様は……
―――ヒュンケル様とて、ダイ様と共に我らをお守り下さったではないか。それに、決して愛想がいいわけではないが、性格も穏やかで情に厚い方だとも聞くぞ。
―――知っているよ。俺だって、あの方に含むものがあるわけじゃない。城内でお目に掛かったとき、我々下々の兵士にも高圧的な態度をなさるところなど、見たこともないからな。
―――では、何故……？

———だからさ、我々のように直に接したことのある者や、かつての大戦であまり被害を受けずに済んだ者は、冷静にそう考えられるにしても……
———……魔王軍に、身内を奪われた者は、ということか……
———ああ。どうしても、感情的に治まらないところもあるんだろうよ。
———まあ……それは、無理もないことかもしれんが……
———そうだよな……
———それで？レオナ様に不満を持つという連中は、かつて女王陛下がヒュンケル様をお赦しになったことや、現在王宮にお迎えしていることが不服ということか？
———そういうことだな。戦時下のことは、魔王軍の侵略を防ぐために必要な判断だったと納得するにしても、大戦後には厳罰を与えて欲しかったと、願わざるを得ないというところだろう。
———そんな馬鹿な話があるか！自分たちに都合のよいように使っておいて、後は打ち捨てろとは！
———俺に怒るなよ。
———あ、ああ。すまん。
———いいよ、俺も同じ気持ちだし。しかしとにかく、パプニカも決して平和そのものじゃないってことさ。
———……何があっても、女王陛下はお守りしなくてはな。
———ああ。俺たちの仕事も、大変な価値があるってことさ。
足音を立てないように注意しながら、そこでヒュンケルは、その場を離れた。
そんな話を耳にするまでもなく、とうに理解していることではあった。パプニカはもちろんのこと、地上のどこを歩いていても、時折投げつけられる呪詛の視線。熟練の戦士であるヒュンケルに、実際に襲い掛かってくる者は皆無であったが、表面上は平和を取り戻したような世界で、未だ人々の心を暗黒に閉じ込めている己の罪を思い、ヒュンケルは、慚愧に堪えなかった。
その闇が、ようやく光の中で寄り添う妹弟子に及ぼうとしている。それを防ぐために、迷いつつも出した結論が、空っぽの部屋と小さなトランクだった。

そのまま、ヒュンケルは、ゆっくりとページをめくる。手のひらよりわずかに大きい程度の小ぶりの画帖ではあるが、その中には、彼が見た世界の姿が描かれていた。
旅の途中、槍の手入れをするラーハルトがいる。即席の釜戸で、野草を煮ているエイミがいる。立ち寄った村で見掛けた、ささやかな祭りの様子もあった。
ページを繰ると、次々に現れる仲間たちの記憶。ダイの見舞いにパプニカにやってきて、久し振りにポップと語らっている師・アバンの姿、占いを頼まれたのだろうか、王宮の侍女たちと向き合っているメルルの横顔。城のテラスで、ダイを前にしたレオナの、屈託なくあどけない笑顔。二冊目の最終ページには、ダイに付き添うかたちで訪れたデルムリン島で、慈しんだ存在と再会したブラスの、感極まった表情が切り取られている。
三冊目を手に取れば、最初のページには、青い海を背景に、クロコダインの威風堂々とした姿があり、その周りには、チウや怪物たちが集っていた。ヒム、アポロ、マリン、ロン・ベルクにノヴァ
――――この地上でヒュンケルが出会い交流した多くの人々の記憶が、そこには息づいていた。
残すページもあとわずか。ヒュンケルは、最後に色付けられた一枚で手を止める。
そこには、儚く優しげな風情の花が、風に踊りながら揺れる、丘の景色が描かれていた。

3

それは四日前のこと。出立に向けて、乾燥肉など幾ばくかの食糧を買いに市場に出たヒュンケルは、偶然そこでマァムに出会った。聞けば、今日はレオナと昼食を共にする約束だったのだという。その帰り、最近よく出入りしている孤児院の子たちに、何か土産を買っ

て帰ろうと考えたとのことだった。
―――お城まで来ても、いつもばたばたと用事だけで終わっちゃうから。
ちょうどそのとき、彼女は、色とりどりの玩具が並べられた、小さな屋台を覗きこんでいるところだった。鮮やかな緑や黄色、青のあれこれを前にしても、際立ってヒュンケルの目を引いた優しい紅色。はっと立ち止まってみれば、そこには、熱心に玩具を吟味するマァムがいたというわけなのである。
―――今日は天気もいいし、久し振りに街を歩いてみたくなっちゃって。ふらっと出たら、市が立っていたの、ラッキーだったわ。
昼食後、レオナは公務があったのだそうだ。すぐに帰宅する選択肢もあったが、突き抜けるような秋晴れの空に誘われ、丸々空いた休日の午後をのんびり過ごす気になったのだと、マァムは楽しそうに言う。平和な日常の中で幸せそうに微笑む顔を見て、ヒュンケルは、苦しいほどの愛しさを覚えずにはいられなかった。
が、そんな心中は、もちろんおくびにも出すことはない。そうか、と、一言だけ呟いて、屋台の前に立つマァムの横に並んだ。彼の口数が少ないのは平生通りのことであるから、マァムは、気を悪くした様子もなく、再び商品の選定にかかる。
―――……随分と、色々な種類があるんだな。
人間社会と隔たった場所で幼少期を過ごした自分が、世間の常識であるとか人並みの知見に欠ける部分があることは、認識していた。ましてや、子どもの遊び道具など、身近で見る機会もほとんどなかったのだから、彼の目には、何もかもが物珍しく映る。ゴムで出来たボールや、柔らかそうなビニール素材で作られた剣のおもちゃくらいは、使用方法も推察出来るが、その他のものは、さっぱりだ。手近にあった濃いピンク色の小瓶を持ち上げて、まじまじと見つめる横顔を、マァムは、いかにも楽しそうににこにこと見上げる。
―――魔法の聖水か？それにしては、毒々しい色をしているが。
第一、子どもが魔法力を回復しなくてはならない場面というものも、想像がつかない。ヒュンケルの言葉に、マァムは、ころころと

笑った。だが、そこには一切の蔑みは含まれておらず、単純に彼の発想をおもしろがっていることが感じ取れる。ヒュンケルは、片方の眉を少しばかり上げてみせると、視線で正答を問い掛けた。
———そうじゃないの。それ、しゃぼん液っていうのよ。
———シャボン？手の洗浄に使う、あれか？
———ええ。それを溶かした液なのよ。しゃぼん玉っていう、とても綺麗でふわふわしたものを作るものなのだけれど……
ふとマァムは、不自然に言葉を切ると、屋台のあちら側でふたりのやり取りを見守っていた初老の男に声を掛けた。
———すみません、このしゃぼん液を全部と、あと跳び縄とボールを三つずつ、下さい。
———あいよ……ボールの色はどうしますかね？
———そうね……青いのと緑と、あと黄色にしようかな。
———はいはい。少しお待ち下せえ。
———……たくさん買うんだな。
大きい紙袋に、がさがさと音を立てながら商品を詰める男と、財布を取り出して硬貨を数えているマァムと、均等に見ながら、思ったままを口にする。
———ボールと跳び縄は、みんなで遊べるし長く使えるから、最初から買うつもりだったの。しゃぼん液は、全員分には足りないけれど、これだけあれば小さな子たちには行き渡るから。大きな子たちには、また今度、別のものをね。ああ、でも……
そこで商人が品物を寄越してきたので、マァムの意識はそちらに向いた。礼を言いながら代金を渡し、荷を受け取る。紙袋はだいぶ嵩張る上、中で荷が安定せず、少し持ちづらそうに見えた。
———マァム。オレが持とう。
———え？……ああ、大丈夫よ。そんなに重くないから。
———重さはたいしたことはないだろうが、抱えづらそうだ。それに、お前が持つと視界が遮られて、この人混みの中では危ない。せめて、ここを抜けるまでの間だけでも、オレが持った方がいいだろう。
その言葉は、もちろん彼の親切心から発せられたものではあるのだが、それだけではなく、もう少しの間、彼女と共にありたいという

願望が心の奥底に潜んでいることに、ヒュンケルは気が付かないふりをする。武闘家であるマァムにとって、この程度の荷が負担であるはずもないし、彼自身の用件はすでに済んでいるのだ。このまま立ち去ることに、何の不都合があるはずもない。
しかしヒュンケルは、マァムの返事も待たず、さっさとその腕から紙袋を取り上げてしまった。彼女はといえば、驚いた様子も見せずにあっさりと荷物を渡してしまったあたり、やはりヒュンケルと同様の思いがあったのかもしれない。もっとも、それを表面に出す性格でもなかったし、彼には、彼女の胸の内など、知り得るはずもなかったが。
———……ありがとう。
———礼を言われるほどのことでもないさ。それより、マァム。
———ん？
———さっき、何か言い掛けていなかったか？
———さっき……？
———シャボン液は、小さな子どもたちにやるという話の途中だったと記憶しているが。
———ああ……そう、そうだったわね。
ふっとマァムは、いたずらっぽい笑みを浮かべると、たたたっと、ヒュンケルの数歩先に走り出た。くるりと振り返り、後ろ手を組むと、ヒュンケルを見つめる。素早い動きではあったが、戦場で目にした動作とは異なり、若い女性らしい愛らしさに溢れた仕草だった。
———あのね、ヒュンケル。
———……なんだ？
返事が遅れたのは、そんなマァムに見とれていたからだ。が、正直に言えるはずもなく、口をついて出る言葉は、ついついぶっきらぼうになってしまう。
彼女は、それを気にする素振りもなかった。
———この後、少し時間はある？一緒に行って欲しいところがあるの。
———それは構わないが……どこへ行くんだ？
———そんなに遠いところじゃないわ。ゆっくり歩いて、三十分く

らいかしら？……いい？
遠慮がちに尋ねる姿勢に、ヒュンケルは、どんなときも相手の気持ちを優先するマァムらしさを感じずにはいられなかった。
この娘が、自分の気持ちを押し通したり、我が儘を言ったことがあっただろうか？強く考えを主張する場面があったとしても、それは、常に相手の安全や幸福を慮ってのこと。そのためには無自覚のまま自身の欲求を押し殺しているような彼女が、今、自分に向けてささやかな願い事を口にしているのが、いじらしく愛しい。拒否する選択肢は、最初から思い浮かびもしなかった。
――――問題ない。今日は、いい天気だからな。たまには散歩も悪くない。それに、
ヒュンケルは、ふいっと口をつぐむ。
しばらく待っても続きがないので、問うような視線をマァムが向けてきていることは察していた。だが、ヒュンケルは、それ以上の言葉は発せず、ちょうど差し掛かった果物の屋台に興味を惹かれたふりをした。

――――うわあ、綺麗！
一面に咲き乱れる可憐な花を目にして、マァムは、無邪気に歓声を上げた。彼女の年齢を考えれば、それは若干、子どもじみた口調ではあったのだが、照れも恥じらいも見せることなく、細い道を進んでいく。
パプニカ神殿跡のある丘は、所々に瓦礫を残してはいたものの、全体を柔らかい植物に覆われ、今ではだいぶ自然本来の姿に帰していた。そんな中にある道は、当然のことながら整備されたものではなく、獣道にも近い、道というよりは隙間といった趣のものだ。決して歩きやすい場所でもなく、彼らふたりの他には、人影もない。おそらく、日頃から、あまり人もやって来ないことだろう。
そんな中を、それでもすいすいと辿っていく身軽さは、さすが体幹の鍛えられた武闘家のものである。彼女の好む、歩きやすい靴を履いているとはいえ、女性には大変そうな道であるのに。しかも、両手は、大きな紙袋で塞がれた状態で。

マァムが購入した玩具の包みは、結局、彼女自身に委ねられることになった。では、ヒュンケルはどうなっているかといえば、彼の腕にも、別の茶色い袋が抱えられている。大きさはやや小ぶりなものの、こちらは、ずしりと重量もありそうだ。
市を抜ける直前、甘い香りを放つ屋台で、ヒュンケルは、幾種かの果物を買い求めた。
――――これも持って帰ってやれ。
と言って。
――――そんな、悪いわ。
マァムは遠慮したのだが、
――――この果実は、おそらくはベンガーナ辺りから運ばれたものだ。珍しいし、喜んでくれるんじゃないのか？
と続けられると、子どもたちの笑顔が脳裏に浮かび、ヒュンケルの提案が魅力的に思えてくる。躊躇う一瞬の間に、ヒュンケルは、さっさと買い物を済ませてしまっていた。
――――ごめ……ううん、ありがとう。
慌てて言い直せば、ヒュンケルは小さく笑って、こちらを頼むと荷物を返してきたのだった。
そんなわけで、彼らはふたりして、荷物を抱えた状態で、坂道を登っていた。季節が異なれば、緑に溢れる場所なのだろうが、今はピンク色の花が丘全体を染め直してしまっている。濃いピンクもあれば、数段薄い花もあり、中には、ほとんど白に近いものもある。どれも柔らかそうな花弁を、優しい秋風にそよがせていた。
――――すごいわ、こんな風になっているなんて、思っていなかった。
きょろきょろと視線を遊ばせながら進むマァムに、ヒュンケルは、からかい混じりの声を掛ける。
――――なんだ、解っていて連れて来たんじゃなかったのか？
――――え、ええ……綺麗な場所って思ったときに、しばらく来てはいなかったけれど、ふっとここが思い浮かんだのよ。それで……ただ、こんなに可愛い花が咲く季節だっていうことは、知らなかったわ。
率直に認めるマァムに、もちろん、ヒュンケルが不快に思うはずも

ない。
―――……では、運が良かったということだな。
優しい声音で言えば、彼女は、本当にそうねと、素直に笑ってみせた。
―――……本当にいい天気だな。
さらに十分ほど歩き立った頂で、連なる丘陵を見回して、ヒュンケルが言う。
一年を通じて穏やかな気候で、美麗な景観を誇るパプニカであるが、今日は、一際美しい日だ。空には、置き忘れられたかのように雲が二つ三つ浮かび、その清らかな白が、青の透明感を引き立てている。向かいの丘からやってきて、こちらの丘を吹き渡る風は、ほんの少し前まで名残を留めていた夏の気配を消し、確かに涼しくなってきてはいた。だが、それも、うっすらと汗ばみながらここまで登ってきた身には、褒美のように心地よい。
しばしの間、ふたりは黙ったまま、並んで風を受けていた。あえて口にはしないが、互いに何を考えているのかは、感じ取れる気がしていた。
ここは、ヒュンケルとマァムが初めて出会った場所だ。もっとも、あのころの面影は、全くと言っていいほど残ってはいないが―――
かつて、ここには石造りの神殿があり、多くの人民が行き交うための小路も整備されており、現在とはまた異なる美を呈する地であったのだ。だが、不死騎団の襲撃により、その美しさは潰える。ふたりが顔を合わせた日には、嵐の襲来を予感させるように空はどんよりと曇り、辺りには、死の気配が濃密に漂っていた。
自然の逞しさとは、すごいものだなと、ヒュンケルは思う。戦後、瓦礫を撤去したのは人の力であるとはいえ、生命の息吹さえ感じ取れなかった土地を、ここまで生き生きと甦らせるとは。眼前に広がる光景を見つめていると、ほんの少しだけ、救われるような感覚がした。
―――……見られて、よかった。
ぽつりと呟けば、左肩の下、触れあうにはわずかに離れた場所から、マァムの優しい声がする。
―――本当ね。それに、あなたにそう言ってもらえてよかった。こ

んな遠くまで連れ出しちゃったし。
―――それは全く構わないが……何故ここに？
先ほどの発言から察するに、彼女は彼を、美しい場所へと誘いたかったらしい。そこまでは理解したものの、その先の目的がまだ見えてこなかった。
―――ん？あのね……ふふふ。
何やら意味ありげに笑うマァムを見遣れば、彼女はその場にしゃがみこみ、手にしていた荷物を地面に置いた。紙袋をごそごそと探ると、取り出したのは、例のピンク色の小瓶である。
―――しゃぼん玉。ここで飛ばしたら気持ちいいだろうなあって思ったら、あなたと来たくなっちゃったの―――これ、あなたの分。ひとつは、あなたにあげたくて買ったの。
―――オレに？
予想もしていなかった展開に、思わずヒュンケルも面食らう。
―――ええ。すごく綺麗なのよ、しゃぼん玉って。だから、見せてあげたくて。
―――いや、しかし……それは、子どもたちのために買ったものだろう？
―――大丈夫よ、数はきちんと数えて買ったもの。小さな子たち全員にあげても、一個余裕があるのよ。むしろ、残っちゃったら、誰にあげればいいのか困っちゃうわ。
言いながらマァムは、小瓶の周りのビニールの包装を、ぴりぴりと剥がし取ってしまっていた。パッケージの中には、緑色のストローも同包されていて、小瓶とそれをまとめて持つと、剥がした包装を紙袋に戻す。そして、立ち上がると、なんとも楽しそうな笑顔を見せるのだった。
―――はい。
差し出された手を前に、ヒュンケルは、困惑する。
嫌なわけではない。子ども用の玩具であるとはいえ、マァムに、こちらを軽く見たりからかう意図など皆無であることは、よく解っていた。言葉通り、彼女は純粋に、彼の知らずにいた美しいものを見せてやりたいと考えただけなのだろう。ただ―――。
―――お前が、まず見せてくれないか？

———え？
———やり方が解らない。手本を見せてくれ。
———……あ……。
人間社会で育った者にしてみれば自明のことであっても、ヒュンケルには、未知のことも多い。そんな彼の立場を常に思いやるマァムのことであるから、今回のことは、楽しい思い付きに夢中になるあまり、ついつい失念してしまっていただけのことなのだろう。ヒュンケルには、彼女を責める腹も失望もなく、単に知らない事柄の手解きをして欲しいと所望しただけのつもりだった。
ところが、どうしたことか、マァムは急に頬を染め、おろおろと取り乱し始める。むしろヒュンケルにしてみれば、彼女のそんな反応を訝しまずにはいられなかった。
———マァム……？
———あ、うん。ご、ごめんなさい、なんでもないわ。そうよね、やり方を教えてあげなくちゃいけないわよね。
まだ動揺の継続している様子ではあったが、ヒュンケルの求めに応じ、マァムは小瓶の蓋を自ら開けた。
———こうやってね、ストローの先端に、しゃぼん液を付けるの。
説明しながら、言葉の通りにやってみせる。そして、
———見ていてね。
一度ヒュンケルに視線を戻すと、前方に向き直り、ストローの端に口を寄せた。
———……おっ……。
見るからに柔らかそうなマァムの唇に目を奪われていたヒュンケルだが、緑の筒の先端から生まれ出でた可愛らしい球体に、思わず感嘆の声が漏れる。一気に息を吹き込んだのだろう、ひとつひとつは、そう大きなものではなかった。しかし、透明であるようで、その実様々な色に輝くシャボン玉は、初めて目にするヒュンケルにとっては、なんとも愛らしく幻想的なものに映る。折から吹き付けた風に煽られ、幾つかは割れてしまったが、多くは雨の雫が地上から逆戻りするかのように、高く高く空へ上っていった。
———なるほど、美しいものだな。
———ね、綺麗でしょう？

感心したヒュンケルの呟きに、いかにもうれしそうにマァムは微笑む。ちゃぷっと音を立てて次のシャボン液を浸すと、
———大きいのも作れるのよ。
と、今度は細く長く、優しく息を注いだ。
ふるふると震えながら大きさを増すシャボン玉を、ヒュンケルは、黙って見つめていた。
表面に、空の青と花たちの彩りが映る。午後の陽光を受けてきらきらと輝き、風に揺らされ一時として同じかたちを留めずにいるそれは、どことはなしに人の心を思わせた。儚げに移ろいながら、それでも必死に消えまい負けまいとする姿。
———ほらっ！
大きく膨らんだシャボン玉が舞い上がる瞬間、マァムが、弾んだ声を上げた。ふわ、り。彼女に与えられた存在が、天を目指して飛翔する。
他愛ない子ども向けの玩具だ。認識はしていたが、無性に心惹かれるものを感じて、ヒュンケルは、気持ち良さそうに宙を飛ぶシャボン玉の行方を目で追っていた。と、左手に何か、温かく柔らかいものと、同時に硬質な感触をも覚える。
———ね、ヒュンケルもやってみて？
視線を向ければ、にこにこと屈託なく笑うマァムがいた。彼の左手を両手で包みながら、シャボン液の小瓶とストローを握らせる。
———やり方、解ったでしょう？
確かに、手順は理解した。手の中の道具に目を落とす。ふと、つい数十秒前まで緑の先端に寄せられていた、マァムの紅い唇が脳裏を過った。
———……ああ。そうだな。
かといって、目の前で無邪気な笑みを見せる女性に、生々しい欲望など、微塵も感じさせたくはない。腹の底に渦巻く熱いものを無視して、一見極めて淡々とした表情で、ヒュンケルは、マァムの示した手本をなぞってみせた。
———うわあ、綺麗！ヒュンケル、上手ね。
———……そうか？
———ええ、初めてとは思えないわ。ね、もっと大きいのも作って

みせて。
まるで幼子のようだ。苦笑しながらも、戦いの最中では決して出せるはずもなかった、これもまた彼女の素顔であるのだと、ヒュンケルはうれしく思う。望まれるまま、次はより慎重に、大きなものを飛ばしてやった。
――――頑張って！ほら、あっちの丘まで、頑張れーっ！
数メートル前まで駆け出し、そんな声援を送っている。彼女を囲むように、小さく群れたシャボン玉、時には大きいものも――――ヒュンケルは、次々と作ってやる。
マァムが振り返る。
空からは穏やかに降り注ぐ光、風は彼女の長い髪と花々を踊らせる。愛らしい煌めきたちは、刻々と色を変えながら、最愛のひとを彩るように包んでいた。
―――― ！
彼女が、何かを言っている。何故か世界は音を失い、声は彼には届かなかった。
―――― ！ ？
輝く笑顔、どこか懐かしい香り。
刻み込みたい、と願った。この刹那を、自分の一番深い部分に、永遠に。
一分でも一秒でも長く、この光景を見ていたい。そんな思いで、ヒュンケルは、ことさらゆっくりと、か弱い存在に生命を吹き込み続けた。静寂の中で、ただ優しい色彩に包まれながら。

――――今日はありがとう。こんなところまで付き合ってもらって、ごめんなさい。でも、楽しかったわ。
小瓶が空になり、丘を駆け抜ける風が最後のシャボン玉を空に連れ去るのを見送ってから、マァムが、優しく微笑んで言った。
――――いや、オレも楽しかった。こちらこそ、ありがとう。
――――ほんとう？それならよかったわ。
発した言葉に嘘はない。初めて経験した遊びは、彼らの年齢には似つかわしくないものではあったかもしれないが、興味深いものだっ

た。何より、マァムと共に過ごせる時間は、ヒュンケルにとっては、シャボン玉以上に優しく輝く、宝そのものであったから。
———それに、果物もありがとう。みんな、とても喜ぶわ。
———そうであったら、うれしい———孤児院の手伝いをしていると聞いているが、やりがいがあるのだろうな。とても楽しそうだ。
———そうね。それはもちろん、色々な問題も起こったりはするから、大変な面もあるけれど、でも、退屈しなくて楽しいわ。子どもたちも、みんな可愛いし。
———そうか。
———ええ。今日はもう遅くなっちゃうから、また今度、そんな話も聞いてね。
マァムの言葉に、胸の奥がずきりと痛む。そんな日が、果たして彼に来るのだろうか？日に日に脱け殻めいてきている、パプニカ城の自室の様子が思い浮かんだ。
ゆるりと頭をひとつ振る。マァムが怪訝そうな顔をしたのが判ったので、手のひらでざっくりと髪をかきあげ、風になぶられた髪が邪魔だったふりをした。
———……だいぶ風が強くなってきたな。
———……そうかしら。そうね、そうかもしれない。
———ここから陽が落ちるまでは、あっという間だろう。風邪をひかないうちに、帰った方がいい。
———……ええ……。
マァムの顔の、不安気な影が色濃くなる。いけない。ここで、真意を察されるわけにはいかなかった。
———オレも、そろそろ戻る。アバンに借りている書物を、返す準備をしなければならないんだ。
彼女の素直な性格を逆手に取った、卑怯な言い方だと解っていた。それでも、これ以上一緒にいては、自分の感情をなだめきれる自信がなかった。
案の定、ヒュンケルの言葉に、マァムは逆らうことなく、こくりと頷く。
———解ったわ。私も、帰ることにする。
———まっすぐ孤児院に向かうのか？オレが時間を取らせたせい

で、子どもたちがそれで遊ぶのは、明日以降になってしまいそうだな……悪かった。
―――まさか。私が誘ったんだもの、ヒュンケルは何も悪くないわ。
―――だといいが。しかし、これ以上お前を引き留めて、土産を待つ子たちの不興を買うのも本意ではないからな。早く行ってやってくれ。
らしくもない冗談を、不器用に織り混ぜるヒュンケルのことがおかしかったのだろう。マァムは、表情を和らげ、くすくすと笑ってみせた。
―――大丈夫よ、もし怒る子がいたら、あなたからもらった果物を見せるもの。
―――賄賂か。そんなつもりはなかったんだがな。だが、結果的には、なかなか利口な買い物をしたということになるんだろう。
―――さすがね……って、褒め言葉になっているかしら？
ヒュンケルも、わずかに口角を上げ、微笑みを返す。
―――どうだかな……さあ、マァム。本当に身体が冷えてしまう。
言いながら、足元に置いてあった、ずしりと持ち重りのする紙袋を取り上げると、彼は、それを彼女の腕に押し付けた。そのまま、もうひとつの包みも持ち上げ、先ほどの荷の上に重ねてやる。マァムは、重そうな顔ひとつせず、ふたつの紙袋を抱えたが、やはり持ちづらいことは確からしく、なんとか安定する位置を見付けると、ポケットからキメラの翼を取り出した。
―――それじゃ、行くわね。今日は本当にありがとう。またね。
荷物の陰から覗く瞳が、柔らかく光っていた。
―――……さようなら。
―――さようなら。またね！
瞬間、彼女の全身は光に包まれ、ふっと中空に消える。見えるはずもないのに、いつまでもその残像が辺りに漂っているように思えて、動けなかった。

その夜、ヒュンケルは、なかなか寝付けなかった。珍しいことだっ

た。鍛え抜かれた一流の戦士である彼は、どんなときにでも、必要に応じて休息を取ることが習い性になっていたのだから。それでも、眠れなかった。目を閉じると、正体のよく判らない息苦しさに襲われて、灯りひとつない部屋の中で、彼は何度も何度も寝返りばかりを繰り返した。
真夜中もとうに過ぎて、未明と言ってもいいくらいの時間になり、ようやくわずかばかりの微睡みに漂う。夢の中では、昼に見た丘の光景が、やはり音もなく広がっていた。微笑むマァムに向け、ヒュンケルは、何事かを必死で訴えていたようにも思う。が、その声もまた、虚空に呑み込まれ、存在することすら許されず霧散していくのだった。
目覚めたとき、眦にわずかばかりの涙があるのを自覚した。それなりの時間、眠っていたように感じたものの、窓の外はまだ薄暗く、光の満ちるまでには遠いことを示していた。つうっと頬を伝う雫は、睡眠不足が招いた身体反応だと信じることにした。
再びの眠りが訪れる気配もなかったので、ヒュンケルは、寝台から立ち上がり、室内履きに足を入れる。ライティングデスクの抽斗から画帖を取り出すと、椅子を窓辺に運び、厚い織のカーテンだけを端に寄せまとめた。
薄いオーガンジーを透かして、空に取り残された月が、儚い光を投げ掛けてくる。その下で、ヒュンケルは、憑かれたように鉛筆を走らせた。ランプを灯せば作業がしやすいことは解っていたが、ほんの小さな光源であっても、人工的な力が作用すれば、夢の気配はあっという間に逃げ去ってしまうように感じられたのだ。それに、視界が明瞭であるかどうかは、あまり関係がない気もしていた。彼はただ、脳裏に焼き付いた情景を、なぞっていくだけだった。
絵筆を握る段になって、ようやく空が白み始める。ヒュンケルは黙々と手を動かし、やがて絵は完成した。
もし、その場に誰かがいても、出来上がった絵を眺める彼の目に、どんな感情を読み取ることも出来なかっただろう。何かを封印し終え、ヒュンケルは、ひとつ小さな息を吐く。それから再び、画帖を目につかぬ場所へ仕舞い込んだ。

そして、今日。地上に別れを告げるときが、一刻一刻、迫りつつある。

4

窓からの風が、わずかに冷たさを増してきた。そういえば、太陽も少し傾いてきたようだ。随分と長い間、画帖に見入っていたことに、ヒュンケルは思い至る。そこにあるのは、単なる絵画ではない。彼の記憶、ここで生きた時間そのものなのだった。
出会い、同じ時を過ごした人々に注がれた眼差し———しかし、最後の一枚に、マァムの姿はなかった。彼の筆が切り取ったのは、透き通る空と咲き誇る花、そして宙を踊る幾つかのシャボン玉だけ。
仮にこの画帖を残していく場合、果たして、彼女がこの絵を見ることはあるのだろうか。そんな日が来たとして、これを目にしたとき、彼女の胸に去来する思いの名は、何だろう。ヒュンケルは、思いを巡らす。
自分の姿だけが、意図的に省かれたような絵。彼が、そんなにもあの風光に魅了されていたのだと、彼女は、しみじみそう考えるだろうか。それとも、彼の関心が自分には向かなかったのだと、ほのかに苦味を覚えるだろうか。もしかしたら失望するのかと、そんな想像をすること自体、おこがましいことなのかもしれないが……。
彼女が抱くだろう懐疑に対する答えを、もちろんヒュンケルは知っている。
描きたくなかった。彼にとって、笑い泣き怒る、移ろうマァムの表情は全てが心惹かれるもので、たとえ紙の上のことであったとしても、そのうちのどれかひとつに、彼女の面差しを固定することはしたくなかった。選べなかった。
そしてまた、描けなかった。彼がどんなに技量を尽くしても、生命力に溢れるマァムの美しさを写すことは不可能に思われた。

何より、描く必要がなかった。
いつ如何なる場所にあっても、瞳を閉じれば、ヒュンケルの中でマァムは生きる。怯むときには、彼の背に手を当て、前に押し出してくれるだろう。疲れ眠る夜には、彼の髪を梳き、慰めてくれる。奮い起つ朝には、それでいいと頷き、笑ってくれる。彼の深奥、彼女は常に共に在る。記憶をかたちとして留める行為に、意味はない。
それが、彼の心髄だ。
だが、そんなことは知らずともよい。マァムには、彼の心の片面だけが伝わって欲しかった。彼女が開かせてくれた目で見た地上は、こんなにも美しかったと。輝いた色に満ちた世界、そこに生きる日々を、彼はとても愛していたと。
そして、もう一面は、決して悟られることのないようにと願う。光溢れる世界は彼女そのものであり、彼にとって、この地を愛することは、そのまま、彼女を愛することであったのだ、と。
綴られた想いの断片は、その半分を饒舌に語り、残る半分には沈黙を貫いてくれるだろうか。そうであるなら、残していくべき――なのだろうか。
もう何日も迷った。いや、ここを発つと決めてから、何週間も迷ってきた。
だが、とうとう処分出来なかった。あまつさえ、最後の一枚まで描き加えてしまった己の不甲斐なさを、ヒュンケルは嗤う。自分を嘲り卑下し、罵ってみる。結局は自分にとって、これは棄てられないものだったということなのだ。
半ば投げやりな態度で、ぱたんと画帖を閉じる。そのまま三冊重ねて、トランクの隙間に仕舞い込んだ。
蓋を閉めようとして、抽斗にまだ何かが残っていることに気付く。取り出してみれば、それは愛用の絵筆だった。いつぞやの旅路で買い求めてから、彼の想いを描き続けた、ごくごく平凡な。
もう、これを使うこともない。廃棄するためにへし折ろうと、ヒュンケルは、両手で絵筆の端を握る。
そして、そのまま、動きを止めた。
風が、強く吹き込んでくる。

戻ることはない。戻ることは、きっとない―――だが。
（オレは、弱い男だ）
ゆっくりと、腕が下げられていく。
（それでも、マァム。オレは―――）
手から、力が抜けた。と、絵筆はそのまま手のひらから転がり落ちて、トランクの中へと吸い込まれていった。
はっと顔を上げ覗き込めば、積み重ねられた荷の谷間に落ち込んでしまったのだろうか、漆黒の闇に呑み込まれてしまったように、その行方を捉えることは出来ない。
ヒュンケルは、ぎゅっと唇を噛む。トランクの縁に手を掛けて、ほんの刹那、逡巡した。
瞼を伏せる。銀の睫毛が小さく震えていたのは、きっと風のせい、だったろう。
目を開き、彼は、蓋を閉じる。そのまま、何かから逃げるように、掛け金を下ろした。
ぱちん、と、硬質な音が、朱く染まった部屋に響いた。

終